

(表紙仮)

安曇野市東部
アウトドア拠点整備基本構想 (案)



令和6年(2024年)3月

第1章 基本構想の策定にあたって.....	- 3 -
1 基本構想の趣旨.....	- 3 -
2 基本構想の対象期間及び他計画との関わり.....	- 3 -
3 対象期間.....	- 4 -
4 基本構想策定のプロセス.....	- 4 -
第2章 明科地域の現況と課題.....	- 5 -
1 明科地域の地勢、商業の変遷.....	- 5 -
2 明科地域に関する現状分析.....	- 5 -
3 分析から見てきた明科地域のポテンシャルと課題.....	- 16 -
4 明科地域市民、関係者が求めるアウトドア拠点の役割.....	- 17 -
第3章 アウトドア拠点の基本的な考え方.....	- 18 -
1 アウトドア拠点のコンセプト.....	- 18 -
2 アウトドア拠点整備の基本方針とゾーニングの全体図.....	- 19 -
3 にぎわい合流ゾーンの導入機能と整備方針.....	- 22 -
4 管理運営の方針.....	- 28 -
第4章 事業化に向けたスケジュール.....	- 29 -
1 事業スケジュールの想定.....	- 29 -
2 推進主体の整備.....	- 30 -
3 まちと市民の機運醸成.....	- 31 -
4 子どもたちの教育・学校連携.....	- 31 -

第1章 基本構想の策定にあたって

1 基本構想の趣旨

安曇野市では、令和4年4月1日付けで一部の過疎地域の指定を受けた明科地域について、持続的な発展を促進するために、安曇野市過疎地域持続的発展計画を策定しました。

明科地域は市内でも様々なリバーアクティビティが楽しめる犀川や、北アルプスの壮大な景観やスカイスports、トレッキングが楽しめる「長峰山」など、アウトドアアクティビティやスポーツが楽しめる環境に恵まれています。また、明科地域の中心市街地に近い「あやめ公園・龍門淵公園」は、毎年6月頃に見ごろを迎える約3万株の花菖蒲でも知られており、市民の憩いの場や交流の場となっています。「前川」と呼ばれるこの公園内の川は、長年にわたりカヌーの競技場として親しまれ、県外からも多くの競技者が訪れる交流拠点となっています。こうした状況を考慮し、過疎状態を打破するために「アウトドア拠点の整備」が提案されました。

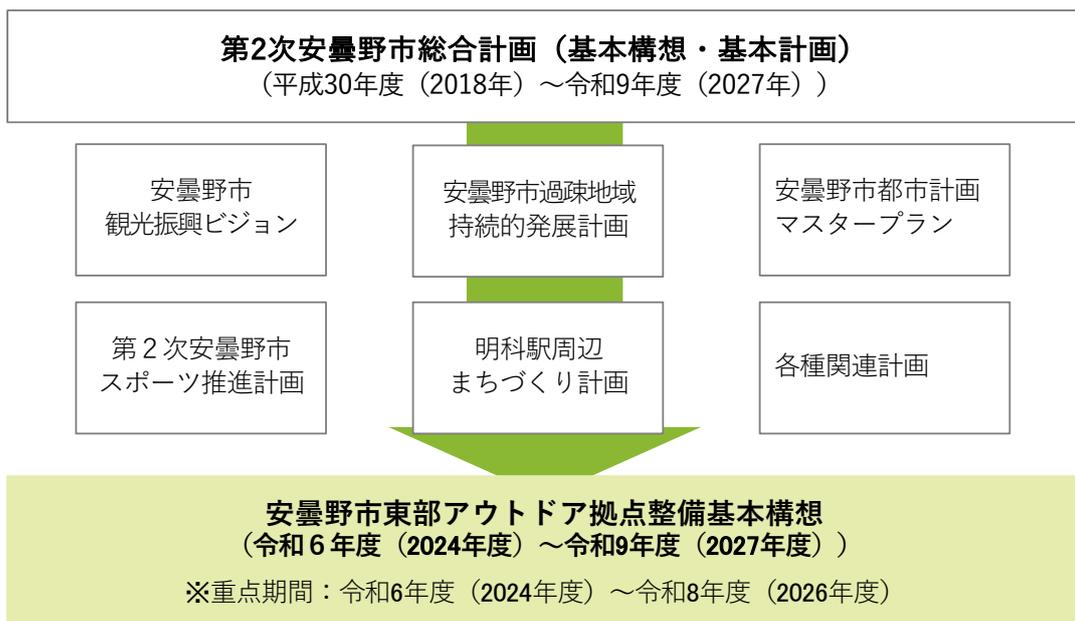
「安曇野市東部アウトドア拠点整備基本構想」は、安曇野市過疎地域持続的発展計画に基づいて、明科地域における「アウトドア拠点」のあり方や整備の方向性について、基本的な方針を示すものです。

2 基本構想の対象期間及び他計画との関わり

本基本構想は、安曇野市明科地域において新たなヒト・モノ・コトの流れを生み出す「アウトドア拠点」の基本的な方向性及び、整備の方針などをビジョンとして定めるものです。

また、安曇野市の最上位計画である「第2次安曇野市総合計画」のもと、各計画との整合性をもって、明科地域の発展に寄与するものです。

<他計画との関わり>



3 対象期間

本構想は、安曇野市過疎地域持続的発展計画と進行をともにするものであることから、構想における重点期間を同計画の期間と重なる令和6年度（2024年度）から令和8年度（2026年度）とし、さらに拠点整備にかかる期間等の関係から、全体の期間を令和9年度（2027年度）までの4年間とします。

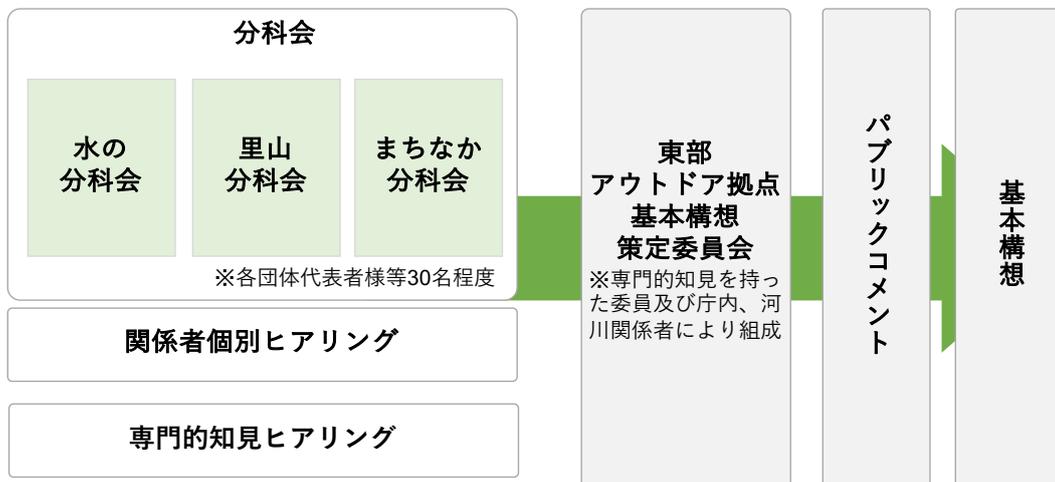
<対象期間>



4 基本構想策定のプロセス

本構想はアウトドア拠点を整備することが目的ではなく、アウトドア拠点を通じて明科地域の過疎を食い止め、未来の人の流れを作っていくことを目的としています。そのため、本構想の策定プロセスにおいては、拠点自体をどのようにするかという観点に加え、拠点整備を通じて地域にどのようなことが起きていくのが望ましいか、またどのような地域の未来像を描くかといったことをできるだけ多くの方からご意見をいただき、共有をできるようヒアリングやワークショップを重ねました。

<プロセスイメージ図>



第2章 明科地域の現況と課題

1 明科地域の地勢、商業の変遷

明科地域は、安曇野市の北東部に位置し、犀川がその中央部を流れています。またその南方では、犀川に高瀬川や穂高川が合流する、三川合流の地域でもあります。

犀川の流域には河岸段丘が形成されており、この段丘の平坦面と周囲の長峰山、押野山周辺の山地を扇頂とする小規模な扇状地の上に明科地域の生活圏があります。

明治期において篠ノ井線の明科駅が開業し、物流の要所となり、昭和27年には塩尻一長野間の道路が国道19号と認定されたことにより、交通や物流拠点として栄えていました。しかし長野自動車道の開通等の近隣交通網の発展により、その役割は徐々に分散化していきました。かつては、里山から山間部にかけて養蚕や煙草の栽培、木炭生産も盛んでしたが、産業構造変化により、山間部での農林業が衰退し、明科地域の人口減少に拍車がかかりました。

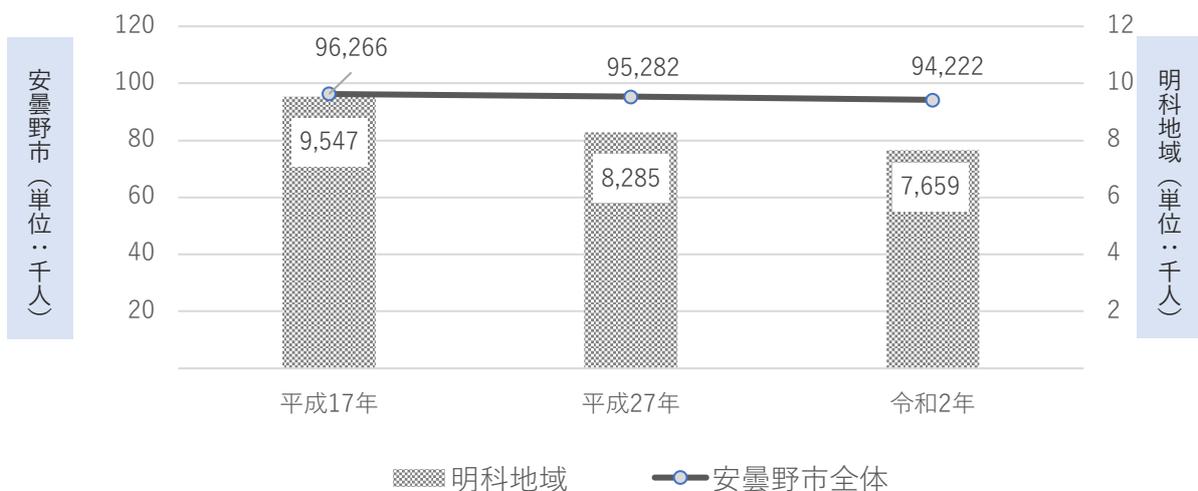
2 明科地域に関する現状分析

(1) 明科地域の人口

安曇野市全体では、令和2年時点の人口が94,222人と、対平成17年で97.9%程度の減少にとどまっているのに対して、明科地域では80.2%まで減少しており、減少幅が大きい状況にあります(図表2-1)。特に、若年層の減少が大きな問題です。(図表2-2)

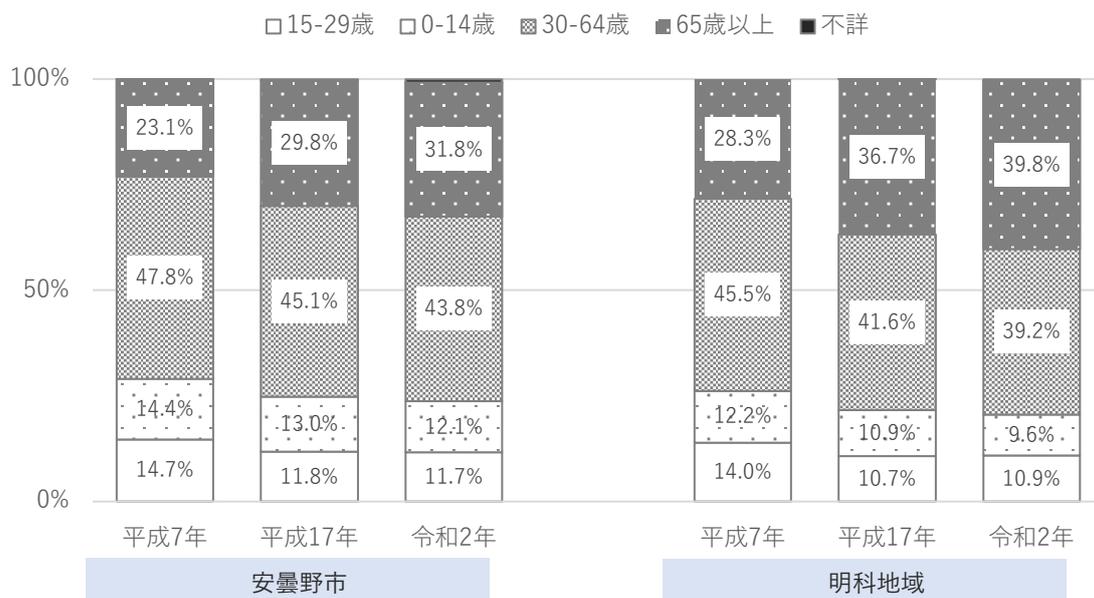
こうした状況を受け、長峰山山頂や「天平の森」といった北アルプスの展望の良さを生かした観光施設、「信州型自然保育認定制度・信州やまほいく」の特化型に準じたサービスを提供する明科北認定こども園など、明科地域東部の里山環境を活かした施設等を通じ、地域に活力を生み関係人口を拡大する取組みが進んでいます。

<図表2-1> 安曇野市全体と明科地域の人口推移



(出典) 国勢調査

<図表 2-2> 安曇野市と明科地域の、年齢構成の変化推移



(出典) 安曇野市過疎地域持続的発展計画

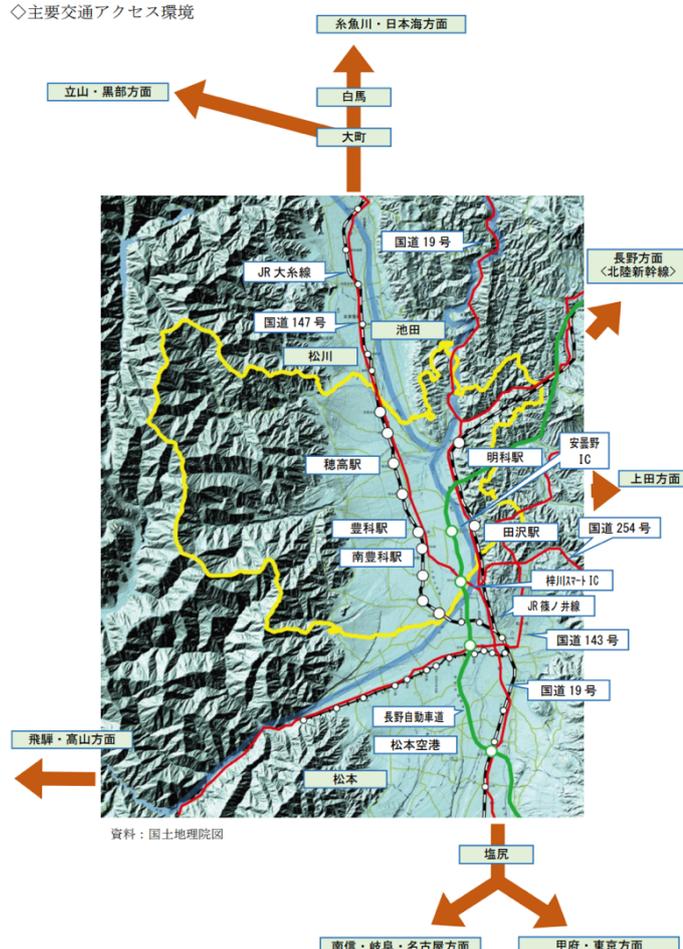
(2) 明科地域へのアクセス

明科地域には JR 篠ノ井線の明科駅があり、松本駅から 20 分程度、長野駅から 1 時間程度で、さらに特急しなの、北陸新幹線を乗り継げば、大宮駅まで最速約 1 時間 50 分で到着することができます。

道路交通網においても同様に国道 19 号が通っているため松本まで 20 分程度、県都長野市までも 1 時間強で到着することができます。また高速道路は長野自動車道の安曇野インターチェンジや筑北スマートインター（令和 5 年 12 月 17 日開通）からも近く、交通アクセスとしては非常に優れた立地にあります。

また、令和 4 年に事業化された松本糸魚川連絡道路「安曇野道路」の整備により、さらに交通面の利便性が高まると期待されます。

◇主要交通アクセス環境



一方で、明科駅周辺には駐車場なども少ないことから明科地域の拠点整備の際には、人が安全に移動するための動線も確保していく必要があります。

(3) 明科地域の資源

①河川・池

<犀川>

明科地域には、北アルプスの槍ヶ岳（標高 3,180m）に源を発する犀川が流れています。犀川の上流部は梓川と呼ばれ、松本盆地を流れてきた奈良井川と合流し犀川となり、御宝田遊水池付近にて、高瀬川、穂高川と合流し、長野市にて千曲川となる一級河川です。

複数の支流からは湧水が流れ込み、一際美しい水面を見ることがもできます。

また、犀川は経済文化の面でも明科地域に深く関わっていました。天保の頃に開設された犀川通船は交通路・輸送路・文化伝搬路として大きな役目を果たしていました。しかし明治 35 年に篠ノ井線が開通し、その役割を終えました。

現在はカヌー、カヤックや釣りなど、ウォーターアクティビティが多く行われるとともに、犀川河川敷の安曇野花火大会への活用や、お水取りといった祭事も行われています。

<万水川>

安曇野市の中央部に流れる除沢を源として大王わさび農場を通り、明科中川手で犀川に合流します。県民グラウンド付近をスタート地点として、入水もしやすく、水質も良いためラフティングやウォーターアクティビティの事業者、個人に人気の川となっています。

<前川>

前川は龍門淵公園の中を流れ、犀川に合流する約 1 km の河川です。主に中部電力犀川発電所の排水と養魚場の水からなっているため、年間を通じて一定の水量があることが特徴となっています。こうした特徴から、民間の有志団体の働きかけにより、一部区間にはカヌースラロームコースが設置され、ここで開かれている複数のスラローム大会には、全国から多くの方が集まっています。また、前川は龍門淵公園内にあるため、公園を利用する人がカヌースラロームをはじめとした川のアクティビティを間近に見ることができる稀有な場所でもあります。今後より資源としての活用が進むためには、公園内の川を活用するためのルール整備や、柔軟な運用、町の人々が楽しむきっかけづくりが必要です。

<犀川>



<万水川>



<前川>



<御宝田水のふるさと公園遊水池（白鳥湖）>

自然体験交流センター「せせらぎ」近くに位置し、犀川のほとりにある遊水池です。周囲は大変見晴らしがよく、特に白鳥が飛来する冬場は多くの方が訪れます。

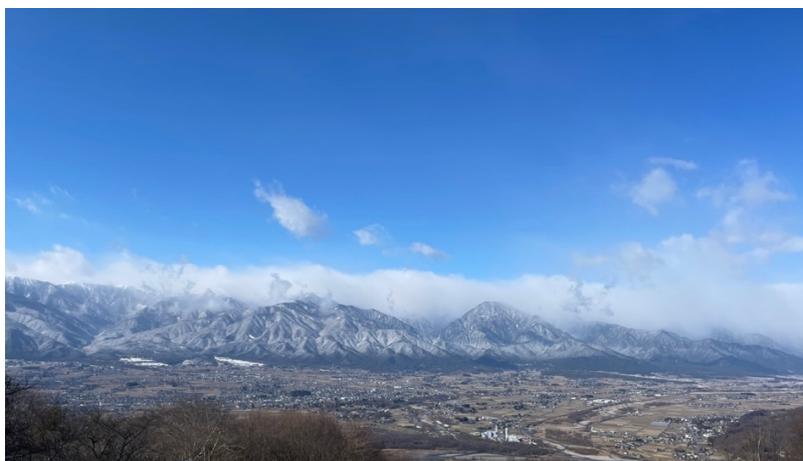
現在は、「御宝田白鳥の会」の方々によって白鳥観察小屋の管理、飛来地周辺のゴミの片付けなども行なっています。また、御宝田白鳥の会の方々により、日々の白鳥の飛来数が経年でカウントされているなど、明科近辺の自然環境を知ることのできる貴重な場所となっています。一方で活動財源・人員が十分でないこともあり継続的な活動にするには管理主体の補強や他事業者との連携が必要です。

②北アルプスの眺望と長峰山

明科地域に広がる長峰山は標高 933m。山の頂上はとても見晴らしがよく北アルプスの絶景と犀川、高瀬川、穂高川の三川合流の風景を楽しめるとともに、初冬から春先にかけては雲海を見ることができます。この風景の美しさに、昭和 45 年、作家の川端康成氏、井上靖氏と日本画家の東山魁夷が一同に会した際に「残したい静けさ・美しさ」と絶賛したと言われています。また現在は、絶景に加えて山頂にある長峰山休憩展望台や歴史の塔が明科の里山のシンボルとなっています。

長峰山はこの絶景のビューポイントに登山口から 1 時間程度で山頂にたどり着くことができ、連なる光城山への縦走もできることから、ハイキングやトレイルランニングをする方に親しまれています。また、近隣地域の宿泊施設の宿泊者を対象とした絶景見学ツアーなども実施されています。周囲には天平の森オートキャンプ場があり、テント泊のほかロッジ、風呂、食堂なども整備されており、地域内で最も宿泊者が多い箇所となっています。

長峰山はスカイアクティビティを行う場所としても優れています。プロのパラグライダーパイロットからも「平地が広く、北アルプスや松本市まで一望できること」は大きな魅力であると評価を受けています。現状では降りる場所が遠く熟練者向けのコースであることから、より多くの方に親しんでいただくためには、初心者向けの着陸場所の整備をすることが必要です。また、発射台や発射台周辺の樹木の整備も求められています。



長峰山からの眺望

③歴史的資源

明科地域は、歴史的な資源も多く有しています。このうち「明科廃寺」は、信濃国内においても最も古い仏教寺院で、7世紀末から8世紀の初頭に建てられたと推測されています。現在も調査研究は続いているのですが、この発見から、明科地域に当時の地域を支配する豪族がおり、並びにこれを支える一定の集落があったことがわかります。そのほか、明科地域からは北村遺跡など重要な遺跡も発掘されています。

近代のものでは、長峰山の麓に旧国鉄篠ノ井線の廃線敷があります。篠ノ井線は明治期につくられ、長野から松本をつなぐ重要な路線でした。このうち、西条-明科間は昭和49年（1974年）に新線敷設工事が始まり、昭和63年（1988年）に開通、旧路線は役割を終えます。しかしながら、旧篠ノ井線の西条-明科間は山や谷が多く、山肌や岩を削り、深い谷を埋めた難工事の末に線路が敷かれており、現在も廃線敷を歩くと長峰山側の山肌と美しいケヤキの木々を見ることができます。また、旧第2白坂トンネル、漆久保トンネル、三五山トンネルは明科で焼かれた煉瓦が使われており、明治時代の面影を色濃く残す総煉瓦造りで非常に趣があります。現在は、三子山トンネルから第2白坂トンネルまでがハイキングコースとして整備されており、多くのツアー、観光客が訪れています。より多くの方に楽しんでいただくために、東屋などの休憩施設やトイレの整備、歩道の整備体制の充実などが求められています。

④明科のヒト、コト

明科地域や周辺の安曇野市内の地域では、上述した明科地域の資源を活用した様々なアクティビティやイベントが展開されているとともに、明科地域を横断で盛り上げるための地域団体等が活動するなどしています。

今後明科地域の活性化に資するアウトドア拠点を整備する上でも、こうした資源を「コト化」する「ヒト」が存在することは、明科地域の大きな強みです。

<明科地域の資源を活用した“コト”の一例>

● 河川を活用したウォーターアクティビティ

明科地域を流れる犀川では、夏季を中心にパドルスポーツを楽しむ方が多くいます。事業者も独自にツアーを開発し、ラフティング等大人数で遊べるアクティビティから、個人のガイドツアー、子ども向けのツアーなど様々な事業が行われています。中でも万水川から入り大王わさび農場の湧水を眺めながら犀川に合流するコースは最も多くの人に利用されています。このコースを利用する人の多くは、龍門淵公園南の砂利広場近くの犀川護岸をゴール地点としています。

龍門淵公園・あやめ公園内を流れる前川のカヌースラロームコースは、北信越国民体育大会で利用されるなど、カヌー愛好家には広く知られるコースです。また、古くから民間団体が主催する「にじますカップ」等の大会が行われており、多い時は200人程度が参加する大規模な大会となっています。現在世界で活躍する選手も、ジュニア時代などに前川で開かれる大会に参加していました。

また、「W R F ラフティング世界選手権 2023」で総合優勝した日本代表チームが事前合宿でトレーニングを行ったほか、ジュニアの合宿等にも活用されています。

● 長峰山からの眺望、ガイド付ツアーとスカイアクティビティ

明科地域にある長峰山から見る北アルプスの絶景は、著名人も絶賛したほど。雲海の季節に、観光協会等を中心にガイド付きツアーが行われており好評です。またこの絶景は、パラグライダーやハングライダーなどのスカイアクティビティを行う方々にも人気で、大会なども催されています。また、長峰山から光城山までのエリアは、ハイキングコースも充実しています。これらコースを活用し、トレッキングと川下り、マウンテンバイク等をセットにした観光メニューの開発が進むなど、里山アクティビティの充実に向けた取組みが進んでいます。

● 遺構を活用したハイキング等

長峰山の麓には、旧国鉄篠ノ井線の廃線跡と当時のトンネルが残されており美しい木立も相まって、ハイキングコースとしての人気を集めています。毎年複数のバスツアーでもプログラムに入っているほどです。周囲にはけやきの森自然園もあり、歴史的な遺構だけでなく周囲の草花や植生なども楽しむことができます。

● 信州安曇野あやめまつり

約3万株の花菖蒲で知られる龍門淵公園・あやめ公園では、毎年6月に信州安曇野あやめ祭りを民間団体が開催しています。期間中は、あやめ深緑ウォーキング、ラフティング体験やニジマスの掴み取り等の体験イベントのほか、多彩なステージイベントが行われます。

● 信州安曇野薪能

信州安曇野薪能は、名誉市民で観世流能楽師として重要無形文化財保持者の栄誉を受けられた故青木祥二郎先生(安曇野市明科中川手出身)の業績を顕彰し、安曇野市の芸術文化の向上並びに観光振興を図るために、水郷明科薪能として1991年に始まり、毎年8月に地域の方々の協力のもとに龍門淵公園で開催されています。

当世一流の能楽師による公演の他に、舞台を主宰する青木道喜先生が指導する「子ども能楽教室」に参加する児童生徒による「子ども能」の発表の機会を設けています。

<明科のヒト>

明科には、上記“コト”を動かしている団体や、明科を盛り上げるために組織された団体、地域の産品を生かすための取り組みをする団体、明科の水辺を盛り上げるための団体など多くの方々が活動しています。今回の基本構想を策定する際にも、多くの団体の方にご協力をいただきました。複数の団体に関わっている方もおり、今後の団体同士連携した動きも期待できます。

(4) 明科地域の観光及び滞在

安曇野市は、長野県内主要観光地の延べ利用者数上位 50 箇所のうち、「安曇野穂高温泉郷」が 8 位・111 万人（平成 30 年：167 万人）、「ほりがね道の駅」が 15 位・80 万人前後（2018 年：82 万人）、烏川溪谷 22 位・47 万人（平成 30 年：77 万人）、安曇野湧水群 24 位・43 万人（平成 30 年：155 万人）の 4 カ所が入っており、県内でも有数の「人が集まる」ブランドを持った地域です。（図表 2-3）

一方で、入り込み客数を月別に見ると、4 月から 9 月の上半期で年間の 6 割超の観光客が安曇野市を訪れており、来訪シーズンに偏りがあることがわかります。12 月から 3 月の来訪客は市全体で毎月 20～30 万人程度と春～夏の半数以下となっており、冬季シーズンの来訪者の確保が課題です。（図表 2-4）

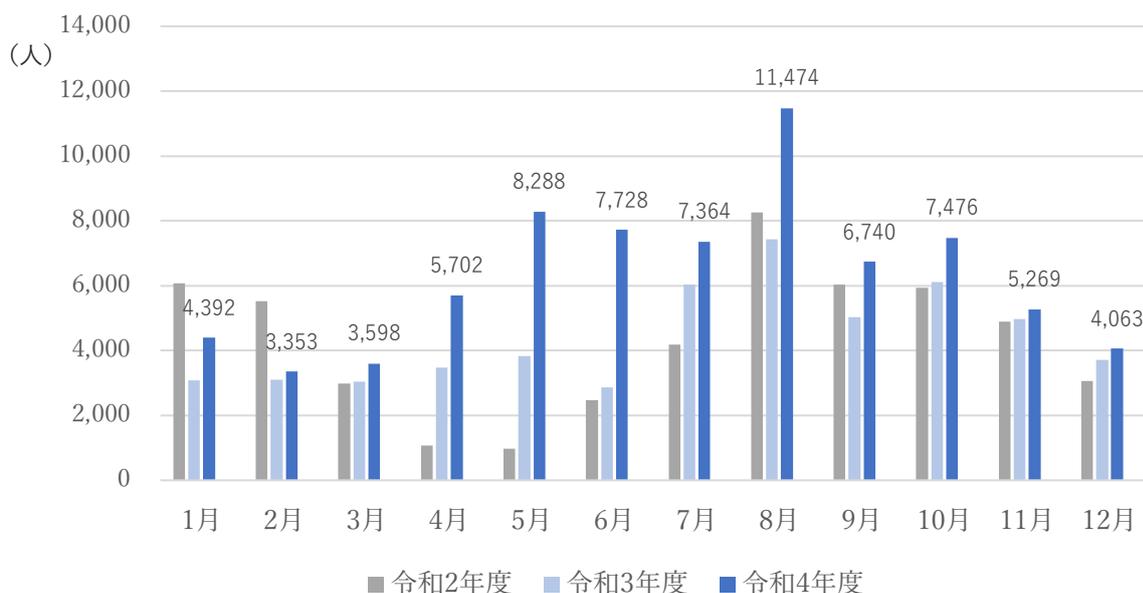
<図表 2-3> 県内観光地延べ利用者数

（単位：千人）

順位			市町村名	観光地名	延利用者数		
R2年	R3年	R4年			R2年	R3年	R4年
2	2	1	長野市	善光寺	3,349	3,138	9,765
1	1	2	軽井沢町	軽井沢高原	5,144	5,484	7,129
3	3	3	諏訪市	上諏訪温泉・諏訪湖	2,408	2,478	3,258
4	4	4	山ノ内町	志賀高原・北志賀高原	2,282	1,791	2,281
5	6	5	白馬村	白馬山麓	1,694	1,396	1,944
6	5	6	諏訪市	霧ヶ峰高原	1,564	1,457	1,880
7	7	7	立科町・茅野市	東白樺湖・白樺湖	1,205	1,254	1,790
10	8	8	茅野市	蓼科	1,004	1,143	1,510
9	9	9	長野市	戸隠高原	1,036	1,085	1,460
16	16	10	上田市	上田城跡	670	709	1,261
24	10	11	安曇野市	安曇野湧水群	438	869	1,160
11	15	12	諏訪市・下諏訪町	諏訪大社	906	709	1,089
14	11	13	上田市・長和町・松本市	美ヶ原高原	709	801	1,005
28	28	14	豊丘村	道の駅南信州とよおかマルシェ	415	436	985
8	12	15	安曇野市	安曇野穂高温泉郷	1,112	766	955
13	17	16	山ノ内町	湯田中渋温泉郷	720	702	906
12	13	17	東御市	道の駅雷電くるみの里	765	764	874
26	22	18	松本市	上高地	427	517	873
57	53	19	上田市	菅平高原	219	263	724
52	42	20	大町市	大町温泉郷	237	336	722
32	19	21	佐久市	佐久平	384	565	721
19	23	22	千曲市	戸倉上山田温泉	532	492	692
15	14	23	安曇野市	ほりがね道の駅・楡の里	707	717	688
22	20	24	安曇野市	烏川溪谷	473	560	665
33	36	25	松本市	松本城	378	385	664

（出典）令和 4 年度長野県観光統計

<図表 2-4> 安曇野市月別入り込み客数



(出典) 長野県観光統計

明科地域の入込客数では、長峰山のみで年間 5,000 人ほどとなっています。龍門淵公園・あやめ公園での観測が中断となっていますが、同様の入り込みが続いていると仮定した場合、長峰山、龍門淵公園での入込合計は年間 6 万人ほどです。なお、近隣の大王わさび農場を含む安曇野湧水群では 200 万人の利用があり、新たな観光客を引き入れるポテンシャルはあると言えます。(図表 2-5)

<図表 2-5> 地点別入り込み客数

(百人)

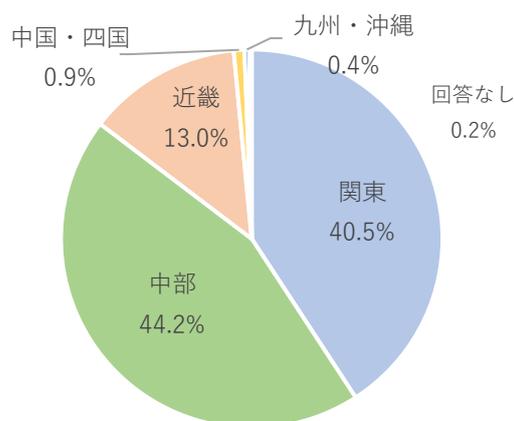
	2006年	2007年	2008年	2009年	2010年	2011年	2012年	2013年
長峰山	413	624	667	644	565	579	520	503
龍門淵公園・あやめ公園	1,747	967	1,002	1,039	1,037	1,271	466	568
(参考)安曇野湧水群	-	-	-	-	-	-	-	-

	2014年	2015年	2016年	2017年	2018年	2019年	2020年	2021年
長峰山	118	102	120	120	102	108	38	48
龍門淵公園・あやめ公園	-	-	-	-	-	-	-	-
(参考)安曇野湧水群	16,755	17,581	17,821	16,157	15,536	14,532	4,384	8,692

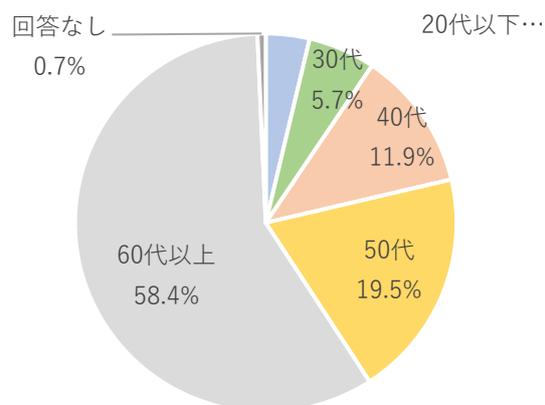
(出典) 長野県観光統計

明科地域を含む安曇野市全体の来訪者の居住地は中部が最も多く 44.2%、関東が 40.5%、次いで近畿が 13.0%となっています。年代別に見ると、60 代以上が 58.4%、50 代が 19.5%、40 代が 11.9%となっており、日本の人口構成よりも高い年齢の方の来訪が多いことがわかります。これは来訪者の多くがリピーターで、自身の経験をもとに来訪しているためであると推測できます。(図表 2-6～図表 2-9)

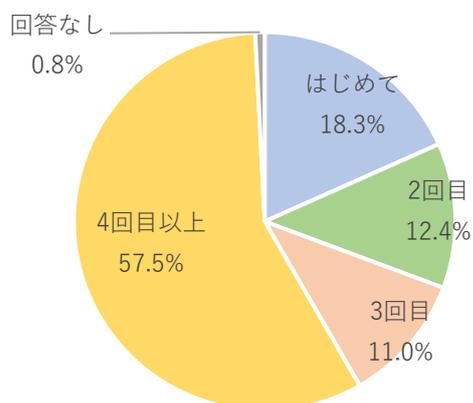
<図表 2-6> アンケート回答者の居住地



<図表 2-7> アンケート回答者の年代



<図表 2-8> 安曇野市来訪経験回数



<図表 2-9> 安曇野市への旅行の動機

項目（複数回答）	割合
泊まりたい宿があった	23%
保養休養	23%
おいしいもの	16%
思い出づくり	12%
家族との親睦を深める	10%
友達との付き合い深める	3%
体験したいプログラムがある	2%
その他	10%

（出典）令和4年度安曇野市観光アンケート

安曇野市は宿泊施設が少ないこと、また周囲に松本市や上高地・黒部ダムの観光地があることから、長野県全体と比較して宿泊を伴う滞在比率及び市内消費額が少ないことが課題となっています。明科地域においても、事業者へのヒアリングで同様の課題が挙がってきていることから、宿泊に関しては同様の傾向であると考えられます。

<図表 2-10> 1人あたり観光消費額、宿泊率、県外比率

	1人あたり消費額（円）	宿泊率	県外比率
長野県平均	3,745	30.1%	63.1%
安曇野市	2,516	25.4%	49.6%

（出典）令和4年度長野県観光地利用者統計調査

(5) 周辺や社会の動向

① 長野県圏域の観光等に関する状況

明科地域としてアウトドア拠点を通じて改めて集客等を考えていくにあたっては、国内の様々な競合地を分析することも重要ですが、場所が近く自然環境が類似しており、顧客層も重なることが多い長野県内のエリアを分析することが重要です。

長野県内には山、川、空、温泉と各シーズンにて楽しめるアウトドア資源が数多くある上に、長野県は、“アウトドア県 Nagano”としてのブランディングを平成 27 年頃から進めており各エリアともアウトドア施策に取り組んでいます。

長野県が示す 6 つのエリアの中では、明科地域は「日本アルプスエリア」にあり、同エリアには白馬や乗鞍など人気の観光地が多くあります。こうした中で、明科地域は、拠点を通じてどのように地域に人を増やしていくべきか、考える必要があります。

<長野圏域マップ>



● 周辺エリアの特徴

日本アルプスエリア：

城下町松本をはじめ、日本の原風景が広がる安曇野、岳都大町や白馬、乗鞍、上高地など、名だたる観光地がひしめくエリア。

北信濃エリア：

善光寺を中核に門前町を形成する長野市。また小布施町、須坂市へと続く一帯は、善光寺平と呼ばれる古き歴史が息づくエリア。

東信州エリア：

避暑地の軽井沢をはじめ、古くから高原リゾートとして開発されてきたエリア。高原野菜やワインなど名産品も豊富。

GO NAGANO 長野県公式観光サイト (<https://www.go-nagano.net/area-guide/regions/>)

② インバウンド市場の復活と観光トレンド

令和元年から始まった新型コロナウイルス感染症にともなう世界的な旅行トレンドの低下は、令和 5 年には日本を含めほぼ解消しました。国内旅行に加えて訪日旅行の回復も早く、民間企業が行った調査結果では、日本は「次の旅行先」としてアジアでトップ、欧米豪では 2 位を獲得しており、今後もインバウンド客の増加は見込めるものと考えます。

観光トレンドとしては、依然として非日常的な空間や体験は人気であるものの、海外民間企業の調査結果によれば、コロナ禍によるオンラインコミュニケーションの急速な普及やさらに

進化したデジタル体験、オーバーツーリズムによる環境破壊、深刻化する温暖化による地球の環境変化などから、一過性の体験ではなく継続的なコミュニティの支援や、観光地の回復、観光地の資源を深く楽しむ体験が求められています。

明科地域には、ストーリー性のあるコトや、地域を盛り上げるヒトが多くいることから、こうしたトレンドも捉えられるコミュニティ構築、ファンづくりができるような拠点構築が求められていると考えます。

③ その他の消費に関するトレンドと、教育に対する期待

民間の研究機関が行っている数年に一度の消費者調査（野村総合研究所：生活者1万人アンケート）では、コロナ禍も経る中で消費の落ち込みが見られる一方、「子どもの教育」と「食料品」「外食」への消費意向は継続して増加していることがわかります。

消費者向けのアンケートでも増加傾向となっている「教育」については、国としても特に人材育成の観点で取り組む必要性を示しています。経済産業省は、令和4年5月に「未来人材ビジョン」を発表しました。この中では、より少ない人口で社会を維持し、社会全体の魅力度を上げていくには教育・雇用の両面から見直していく必要がある」という問題意識から、「好きなことに夢中になれる教育」を生み出し、あらゆる場面で能動的に動ける人材を育成すべきであると提言しています。

「教育」は、子どもたちの教育に限ったことではなく、企業でも同様の課題を持っています。今後拠点を通じて人を集めていく中では、こうしたトレンドにも配慮する必要があります。

④ 日本全体の慢性的な労働力不足

拠点を通じた活性化、まちでの取り組みを考える際には、こうした活動を支える人や運営をする人など、担い手の確保が必要です。現在日本全体で人口減少の局面にあり、首都圏のみならず各地で労働力不足が顕在化しており、明科地域も例外ではありません。

労働人口（15歳から64歳）は、令和2年に日本全体で7,509万人ですが、令和12年（2030年）には6,875万人に減ります。安曇野市全体では、労働人口は令和12年（2030年）に4.7万人、15歳以下の人口は1万人を下回る推計がなされています。

民間企業の調査結果によれば、人手不足状態となっている割合が高いのは、「旅館・ホテル」、「情報サービス」、「メンテナンス、警備、検査」といった仕事で、令和12年（2030年）には日本全体で341万人の労働力が不足すると予測しています。長野県においても、同年に生活維持サービスにかかる労働力に13.7%の需給ギャップが生じると予測されています。こうしたことから、拠点及び拠点を通じた活動について持続的に担い手を確保できる仕組みづくりが必要です。

3 分析から見えてきた明科地域のポテンシャルと課題

これまでの分析から見えてきた、明科地域のポテンシャルと課題は以下の通りです。明科地域には、他にない独特の資源があるとともに、その資源がコンパクトなエリアに詰まっていること、またこれらの資源を生かして町を活性化しようと取り組む個人や団体が多いことが何よりもの強みであり、ポテンシャルです。これらのポテンシャルを、現在の明科を取り巻く社会のトレンドを捕まえて、明科独自の取り組みに昇華させていくことが必要です。

①豊富な資源がコンパクトなエリアに詰まっている

明科地域には、リバーアクティビティを楽しめる「犀川」や「前川」、北アルプスの眺望やスカイアクティビティやトレッキング等を楽しめる「長峰山」、歴史・文化を感じながらハイキング等を楽しめる「旧国鉄篠ノ井線廃線敷」など、コンパクトなエリアの中に多様な自然・文化資源（モノ）を有しており、アウトドア拠点を検討していく際にも、これらの資源を十分に活用していくことが重要です。

②コト・ヒトが充実している

明科地域には、上記の自然・文化資源を生かしたアクティビティや食などが数多くあります。また、花火大会やお水取りなど自然資源を活用した、明科を楽しむ“コト”も複数存在します。さらに、明科には里山、まちなか、河川、それぞれに明科や資源をより多くの人で共有できるように、また明科が活性化していくよう事業や取り組みを行っている方が多数いらっしゃいます。拠点を活用しながら、明科で動きを起こしていくには、こうしたコト・ヒトとの連携が重要です。

③前川の特異性

龍門淵公園を流れる前川は、国内でも珍しく「公園内を流れている」かつ、「カヌースラロームコースが常設されている」川です。海外のリバーパークなどでよく見られる形ですが、日本の場合、ほとんどのスラロームコースは、まちなかからは外れた場所に設置されています。また、中部電力の排水を水源としていることから、年間を通じて流量がおおむね一定となっており、スラローム等の練習やウォーターアクティビティーには適した川です。

④滞在・周遊環境の不足

多様な自然環境がある一方で滞在・周遊するための環境整備が行き届いていないという声が多数挙げられており、森林整備や老朽化したトイレの改善をはじめ、飲食・宿泊、駐車場、二次交通等、明科地域内の滞在・周遊を促す環境整備が求められています。

⑤人口減少や高齢化による担い手不足

明科地域は、昭和 35 年から平成 27 年の間で約 20%減少しており人口減少が著しくなっています。本拠点の整備過程を通じて、また拠点を活用した地域活性化の取り組みの中で、市民自身が明科を好きになり、誇りに思う気持ちを育み、地域の働き手や担い手となる世代の定着を促し、社会減を減らしていくことが必要です。

4 明科地域市民、関係者が求めるアウトドア拠点の役割

以上の現状分析を踏まえ、本構想では前述の通り市民へのワークショップを行いました。この中で、住民・事業者からは「拠点整備を通じて実現したいこと」「どんな地域になりたいか」について以下のような意見が得られました。いただいたご意見からは、アウトドア拠点を通じて作り出されるにぎわいが「まちに還元される」「次世代につながる」「市民自身が誇りに思う」など、観光面にとどまらずシビックプライドの醸成や、まちを好きになる人を増やしたいという明確な意思が示されました。

<拠点を考える前提>

<外部環境>

- ・ 観光市場は活況だが競合が非常に多い。
- ・ 一過性の観光よりも、滞在を通じた観光地の回復やコミュニティの支援などへの関心が高まる。
- ・ 教育や食に対する消費意向は高い。
- ・ 人材育成に対する関心が高い。
- ・ 日本全体として労働力不足であり今後も継続する予測となっている

<内部環境>

- ・ 明科地域の今後のエネルギー源であるヒト・モノ・コトのポテンシャルは高い。
- ・ コンパクトなエリアに川、空、山、歴史があり、独自性が高い。
- ・ 担い手となる人口が減少しておりガイド等も十分ではない。
- ・ 明科地域に対する満足度や定住意向が低く、市民のファン化が必要。
- ・ 宿泊施設が少なく、日帰りが多い。

<拠点を通じて目指したい姿、実施したいこと> (WSより)

アウトドアだけではなく
まちに還元できる、
まちにつながること

次世代につなげていく、
子どもたちに明科を
好きになってもらいたい

来た人が楽しめるガイド
やインストラクターがい
る、魅力がある

市民自身も動きを知り、
明科を誇りに思ってもら
えるように

外から来る人も「ファン」
になってもらい、
環境を大切にもらい、
一緒に盛り上げていきたい

**川から里山、空までまち全体をつなぎ、誰もが楽しめる拠点
子どもや地域内外プレイヤーを巻き込んだ、人材の発掘・育成・連携の拠点**

拠点を通じて、明科のヒト・モノ・コトがつながり
新しい人たちが集い繋がる拠点となることを目指す。

第3章 アウトドア拠点の基本的な考え方

本構想の策定にあたり、「上位関連計画等」、「明科地域の現状と課題」、「市民及び関係団体等へのヒアリングやワークショップ」を踏まえ、次の考え方に基づきアウトドア拠点のコンセプトを整理しました。また、コンセプトの実現に向けた拠点整備のあり方を明確にするため基本方針を整理しました。

1 アウトドア拠点のコンセプト

concept

人、自然、歴史が“巡る” 水郷のにぎわい合流拠点

明科地域は小さなエリアでありながら、川・山・空といった多種多様なアウトドアに親しめる環境に恵まれています。なかでも川でのアウトドアは、前川でのカヌーや犀川でのラフティングなど「水郷明科」を象徴するものです。

そこで、水辺のアウトドアの中心地である龍門淵公園・あやめ公園周辺をにぎわいの発信地と位置付け、拠点施設を同所周辺に整備します。拠点は、水辺のアウトドア利用者向けの機能を強化するとともに、人材育成の場として、また明科地域に広がる里山や空でのアウトドア、歴史文化の情報発信地としての機能も盛り込みます。

この拠点を中心に子どもから高齢者まで幅広い世代の人々が地域内外から集まり、まちを巡り、新たな出会いや活動が生まれ巡る場となること、そして、市民自身の明科に対する誇りと愛着を一層深める場となることを目指します。



2 アウトドア拠点整備の基本方針とゾーニングの全体図

(1) アウトドア拠点整備の基本方針

基本方針 1ー

「にぎわいが巡る」かわまちづくり

明科の象徴である犀川・前川に隣り合う龍門淵公園・あやめ公園に、にぎわいを生み出すアウトドア拠点の中核としてセンターハウスと憩いエリアを整備します。また前川を中心にトップアスリートも練習ができるような環境を整えることで、選手、子ども、ファンが集うような、明科に新たな人流を生み出していきます。明科駅からまちなかにかけては、現在取り組みが進む空き家・空き店舗の活用等を通じ、人の流れをつくりだす情報発信や飲食、宿泊等の機能を誘導します。これにより明科の川とまちが一体的に賑わう状態を目指します。



基本方針 2ー

「自然が巡る」体験づくり

長峰山での空のアクティビティや里山体験などを中心に、里山、川、空でより連携した一体的な体験づくりを行います。



基本方針 3ー

「歴史・文化が巡る」人づくり

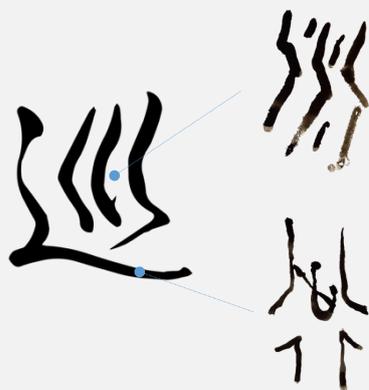
旧国鉄篠ノ井線廃線敷遊歩道を中心に、明科の歴史や文化を学ぶ取り組みを進めます。



<コラム>

巡るという言葉には、いろいろな意味があります。①物の周りを進む。②あちこちらとまわり歩く。③ある物事を中心として関係する。④まわって再びもとに戻る。など、漢字の成り立ちから意味が生まれています。

一見“ありきたりな”、“よく見る”コンセプトに感じるかもしれませんが、三川が合流し豊かな水資源を持つ明科という土地を考えたときに、“巡る”という漢字がピッタリと当てはまるように感じます。さまざまなものが失われていく時代だからこそ、このアウトドア拠点に想いを巡らせ、明科の人を、自然を巡り、「巡る」ことで地域を次の時代に巡らせる。そのきっかけにアウトドア拠点がなってもらいたい。そのような想いが込められています。



水が流れる様を描く
象形は、「川」を表す

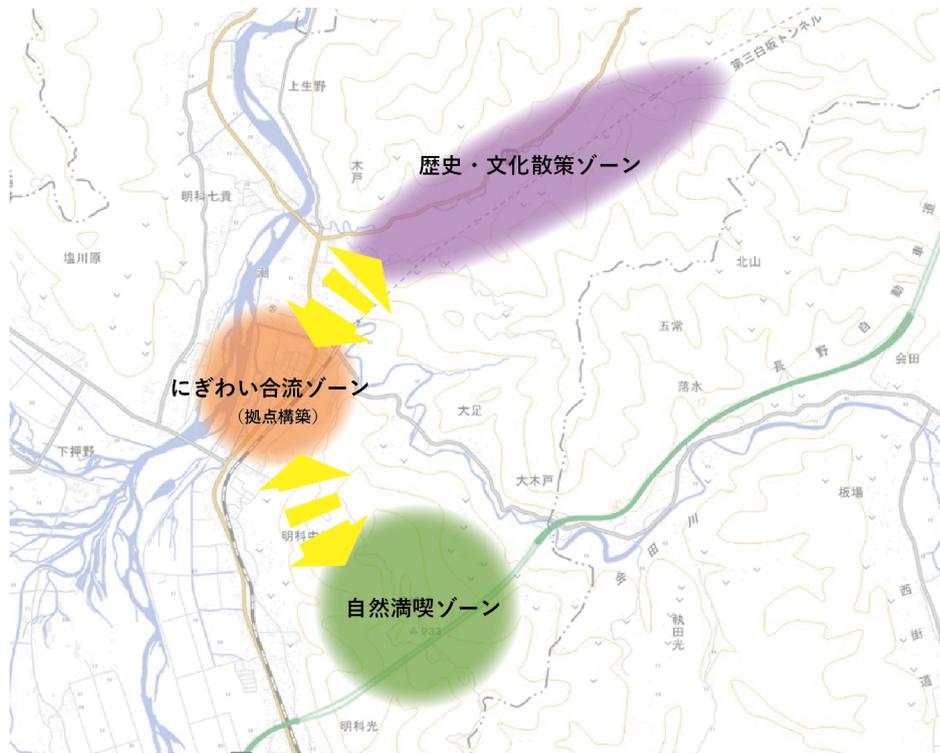
立ち止まる足と十字路の
象形は、「行く」を表す

めぐる - 巡る

「川」のように一定の道筋に従って「行く」ことを意味し、そこから「巡」という漢字が生まれました。

(2) 明科地域の全体ゾーニング

本構想では、拠点整備を行う龍門淵公園・あやめ公園から明科駅までの「にぎわい合流ゾーン」を中心に、旧国鉄篠ノ井線廃線敷を中心とした「歴史・文化散策ゾーン」、長峰山を中心とした「自然満喫ゾーン」を設定します。また、にぎわい合流ゾーンを中心に、各ゾーンとの連携、明科地域全体のにぎわいが波及するよう取組みます。各ゾーン間をつなぐ回遊手段については地域の課題であり、新たなアクティビティの活用等解決につながる方法も検討していきます。次頁以降、「にぎわい合流ゾーン」の詳細の方針について記載します。



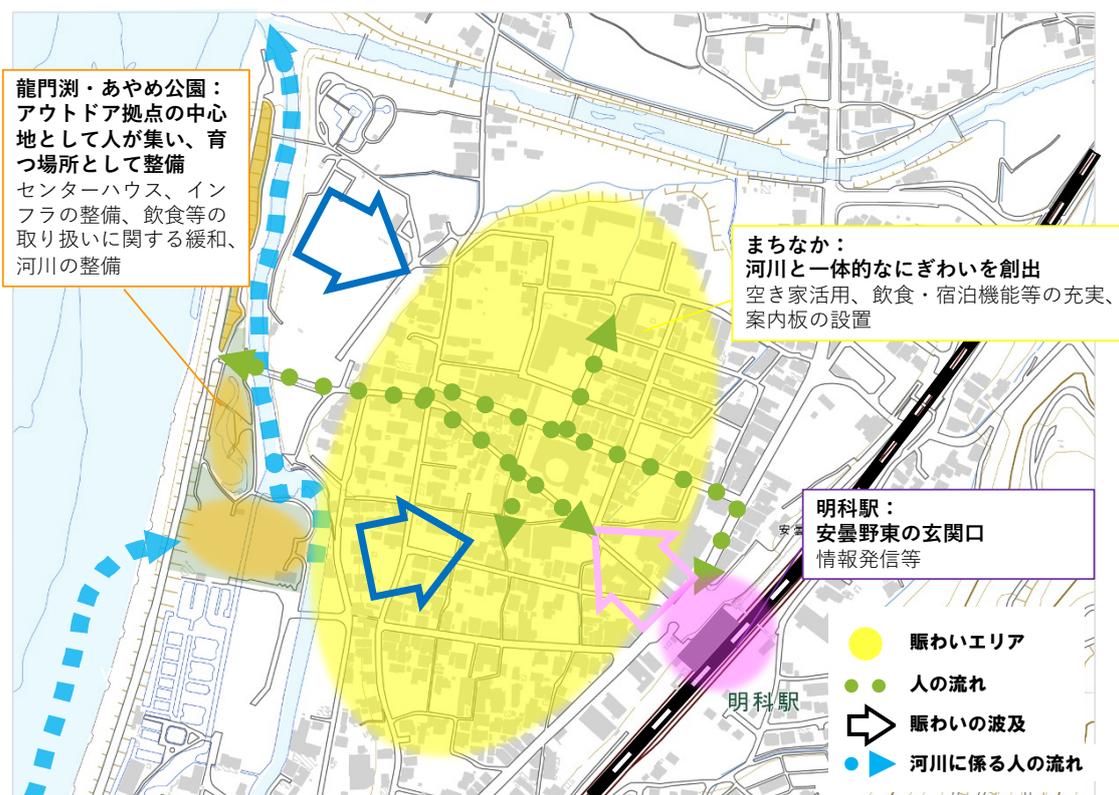
ゾーン名	活用できる資源	活用の方向性	取組方針
にぎわい合流ゾーン	<ul style="list-style-type: none"> 龍門淵公園・あやめ公園 前川・犀川 御宝田水のふるさと公園 遊水池（白鳥湖） 明科駅周辺 空き家・空き地 	<ul style="list-style-type: none"> 初心者から上級者までWAを楽しめるリバーパーク 地域内外の人々が利用できる憩いの場 情報発信・交換拠点 	<ul style="list-style-type: none"> センターハウスを含む滞在環境の整備 前川のコース整備 飲食、宿泊施設の拡充 担い手や選手の育成、スポーツクラブの設置
歴史・文化散策ゾーン	<ul style="list-style-type: none"> 旧国鉄篠ノ井線廃線敷 	<ul style="list-style-type: none"> 「東の玄関口」としての歴史文化を学べるまちあるき 	<ul style="list-style-type: none"> ルートの環境整備 トイレ、駐車場の整備 担い手の育成
自然満喫ゾーン	<ul style="list-style-type: none"> 長峰山・天平の森 金玉池 	<ul style="list-style-type: none"> 北アルプスの眺望と自然を楽しむ里山と空のアクティビティ（トレッキング、ハングライダー、パラグライダー、MTB、自然観察 etc） 天平の森でキャンプ、グランピング 	<ul style="list-style-type: none"> 通年で楽しめる眺望やルートの環境整備 トイレ、駐車場の整備 植物や生物の保護 担い手の育成 地域通訳案内士との連携

3 にぎわい合流ゾーンの導入機能と整備方針

(1) にぎわい合流ゾーン全体の整備方針

アウトドア拠点整備を行うにぎわい合流ゾーンについては、龍門淵公園・あやめ公園内を中心に、拠点施設となるセンターハウスや憩いエリアの整備を行います。また、明科駅からまちなかにかけては、まちなかの既存事業者や団体と連携し、まちなか拠点として活用できるよう空き家、空き地活用などを誘導し、にぎわいの創出に努めます。

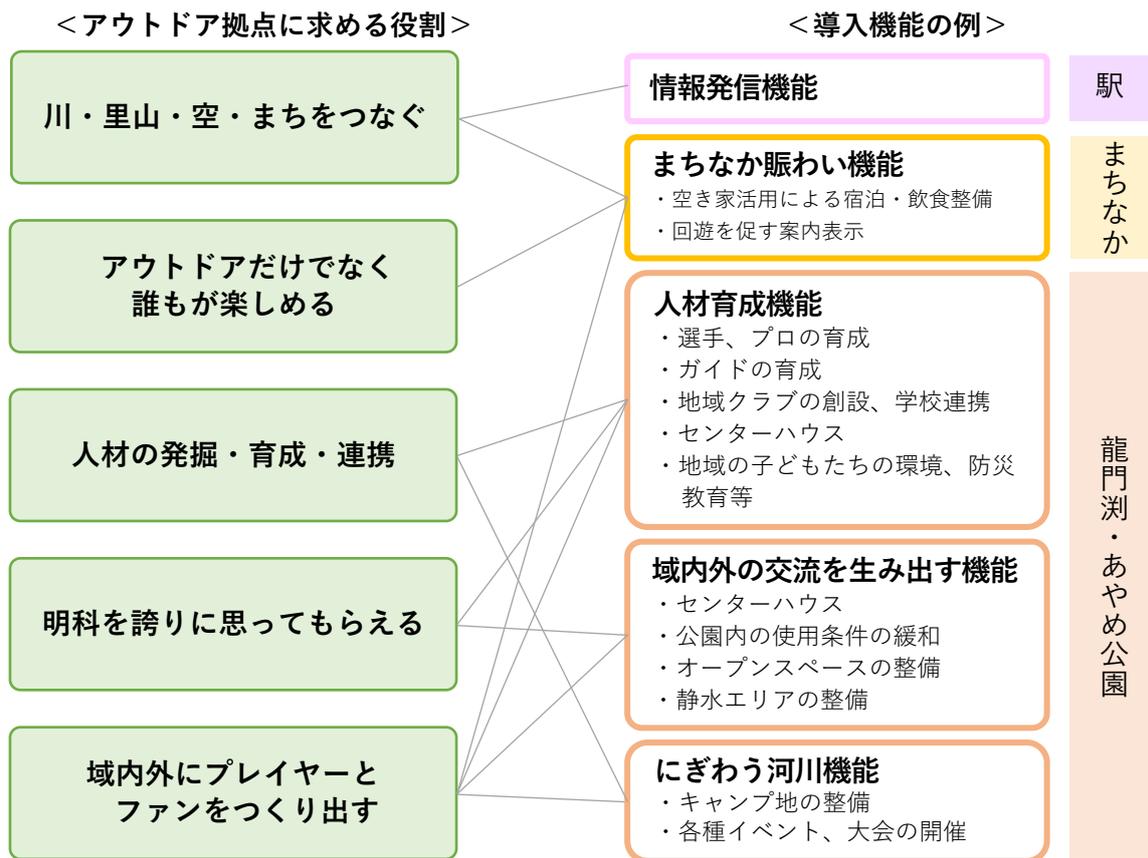
<にぎわい合流ゾーンの詳細>



(2) 拠点に導入する機能と、拠点を通じて達成したい姿の整理

にぎわい合流ゾーンに備える機能については、ワークショップ等を通じて市民が求める拠点像を考慮して検討しています。次頁にその関係性を記載します。

ここでは、公共と民間の区別なく、市民が求めるアウトドア拠点の役割に資する機能を示しています。なお、各機能については、今後の具体的な整備に際して各事業者と協議の上、調整し、人、にぎわい、自然資源が巡る拠点整備を目指します。



(3) 各ゾーンの機能と整備方針

① 明科駅周辺（情報発信）

明科駅は、安曇野市の東の玄関口となります。アウトドア拠点や長峰山などのにぎわい合流ゾーン、自然資源ゾーンや、旧国鉄篠ノ井線などの歴史・文化ゾーンへの来訪を促す案内板の設置等を、事業者との協議を踏まえて推進します。

② まちなか（空き家活用、飲食・宿泊機能等の充実、案内板の設置）

にぎわい合流ゾーンにおいて、まちなかは河川と一体的に賑わう場として整備します。明科駅から龍門淵公園・あやめ公園の間には、点在する空き家や駅前の空き地等があります。持ち主、地主と協議しながら、飲食店、宿泊施設等様々な人が利用・滞在できる施設整備を誘導します。

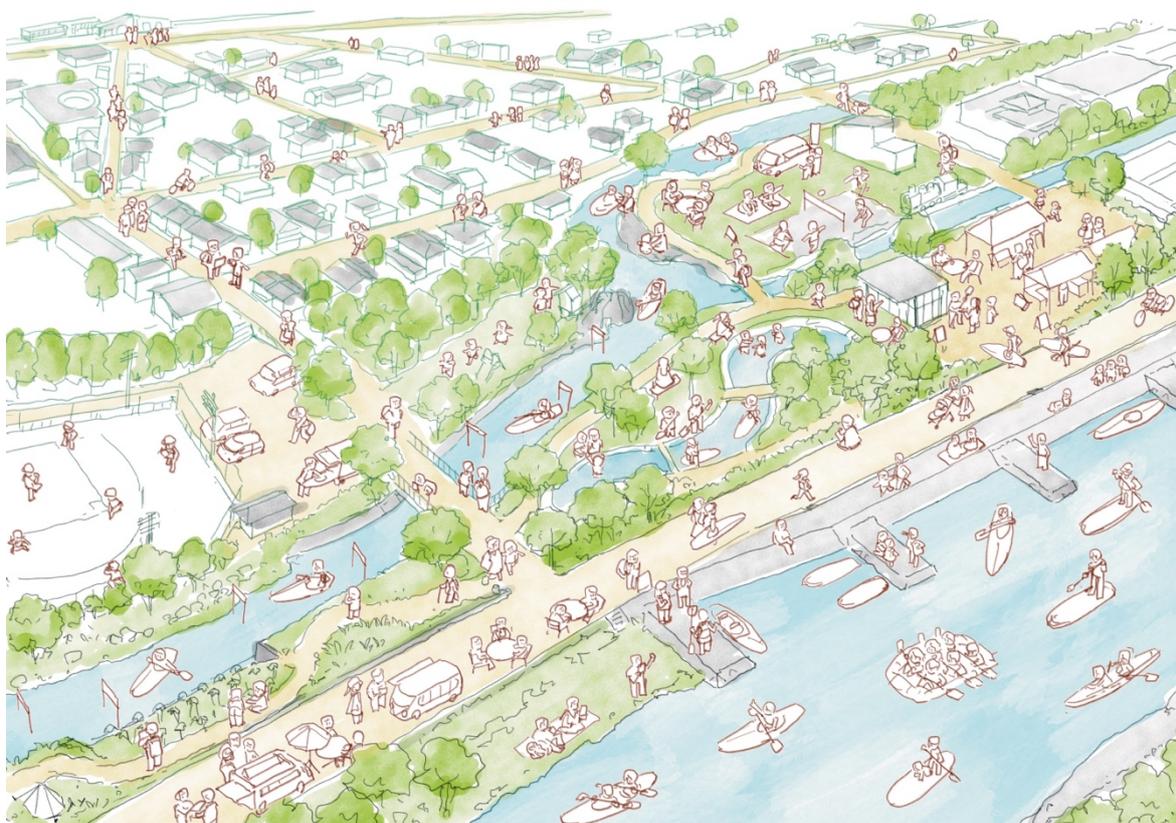
また、カヌー等のスポーツアスリートの育成やガイド育成などにおいては、トレーニングルームや会議室、大人数の宿泊・滞在ができる施設が必要となります。既存の公共施設や空き家・空き地を活用し、これらの機能の整備を検討、支援します。これらの取り組みについては、明科駅周辺まちづくり委員会等の関係団体、事業者等が進める既存の取り組みや施策等との整合性を図りながら検討していきます。

③ 龍門淵公園・あやめ公園（水に触れ合う環境整備、教育、飲食等の充実）

龍門淵公園・あやめ公園はにぎわい合流ゾーンを中心地として、人が集うセンターハウスの整備、多くの方が集いやすくするためのキャンプ地、公園を活用したイベント等を行いやすくするための草地の整備、トイレや水道等の整備、飲食等の取り扱いに関する条件の緩和等も行っています。

当該エリアは水郷明科を体現する場所であり、すでに前川を中心に子ども向けの大会や地域の方が集うイベントなども行われています。まちなかから接続しやすい環境を活かした地域の子どもの教育や学校連携、選手やガイドの育成など、“教育”や“次世代の育成”などにつながる機能も強化していきます。

なお、本エリアは整備を中心的に行う場所となるので、整備方針は次の項で詳細を説明します。

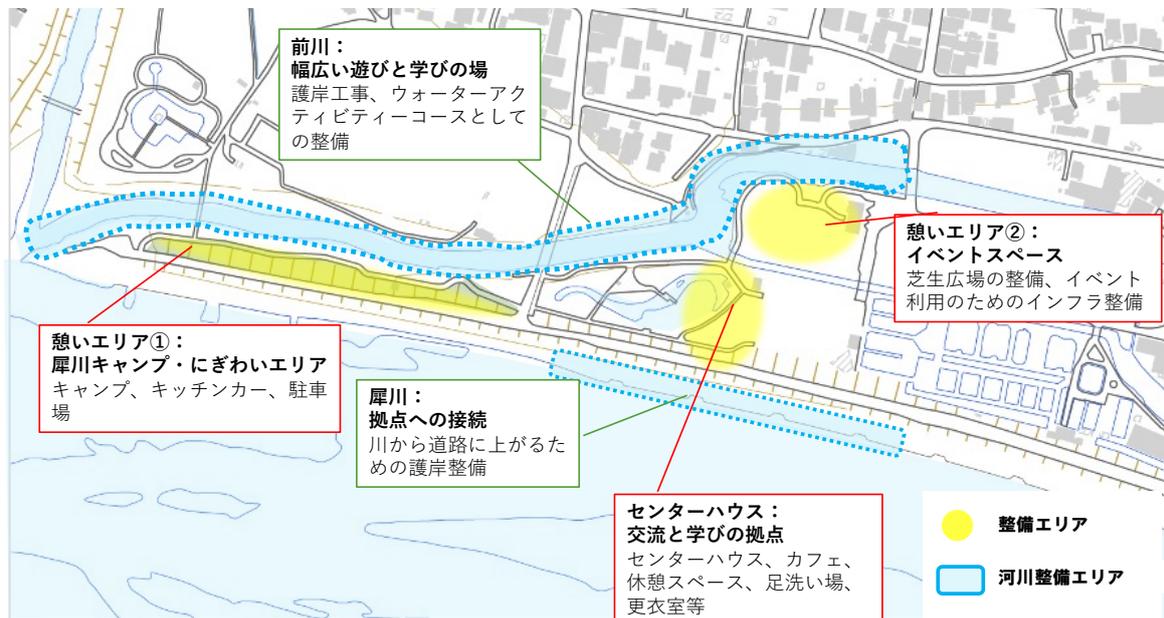


(4) 龍門淵公園・あやめ公園の整備方針

次に、中心的な整備エリアとなる、龍門淵公園・あやめ公園に関する整備の方針を記載します。龍門淵公園・あやめ公園の整備については、「センターハウス」、「憩いエリア①～②」、「前川・犀川」の3つのエリアで行います。

なお、公園全体として人が回遊、利用をしやすいよう、上記以外にも案内表示や樹木・草木の整備などを行うほか、これまで公園内で行われてきた薪能やあやめ祭り等のイベントも明科の歴史・文化を体験できるものであり、今後も継続して開催できるよう整備を進めていきます。

<公園整備イメージ>



① センターハウス（人材育成機能、交流機能）

人材育成機能、交流機能としてセンターハウスを公園内に設置します。センターハウスには、河川や公園を利用した人が使う更衣室やシャワー、公園利用に伴う受付機能、選手などがつかう会議室を備えます。

また、公園利用者が広く立ち寄って使いやすい空間となるよう、休憩スペースや足洗い場、カフェなども設置し、域内外の人が交流する場とします。

② 憩いエリア①（交流機能、にぎわい機能）

犀川と前川にはさまれたこちらのエリアは、ウォーターアクティビティを楽しむ人がより長い時間、充実して過ごすことができるようテントを張って宿泊することができるよう周辺を整備するなどします。イベント催事の際には、キッチンカーなども出られるよう路面の整備をします。

③ 憩いエリア②（交流機能、にぎわい機能）

プールの旧受付棟の立つ芝生広場は、現在もイベントなどでは多くの人に利用されています。本構想においても、この機能をより充実するために、当該エリアは、イベントスペースとして活用しやすいように整備を行います。公園自体をより活用しやすくするよう、都市公園の利用条件に関する緩和等も進めてまいります。

④前川・犀川

水郷明科の特徴とも言える犀川と国内でも珍しい“公園内のスラロームコース”前川について、より多くの人を楽しみ、また拠点整備の中核でもある教育・人材育成機能を強化するため、前川、犀川の整備を行います。

前川については、これまでも長く行われてきたスラローム大会等で域内外の多くの方が集ってきました。また、この大会に参加した子どもが世界で活躍する選手にもなりました。この整備を通じて、これまで川や水から縁遠かった子どもや親世代が水辺の楽しさと安全を学ぶ機会となり、明科の魅力を見つけていけるような整備、運営を目指します。

また、犀川・前川を守り続けるために、環境に配慮しながら整備を進めていきます。



アウトドア拠点整備を通じた明科地域の未来の姿～2027年のある1日～

私は明科の大切な歴史を次世代に繋げていくために、ガイド講座を受けてガイドになったんだ。今日も明科駅から来たお客様に篠ノ井線廃線敷を案内してきたよ。

明科に暮らす
観光ガイド



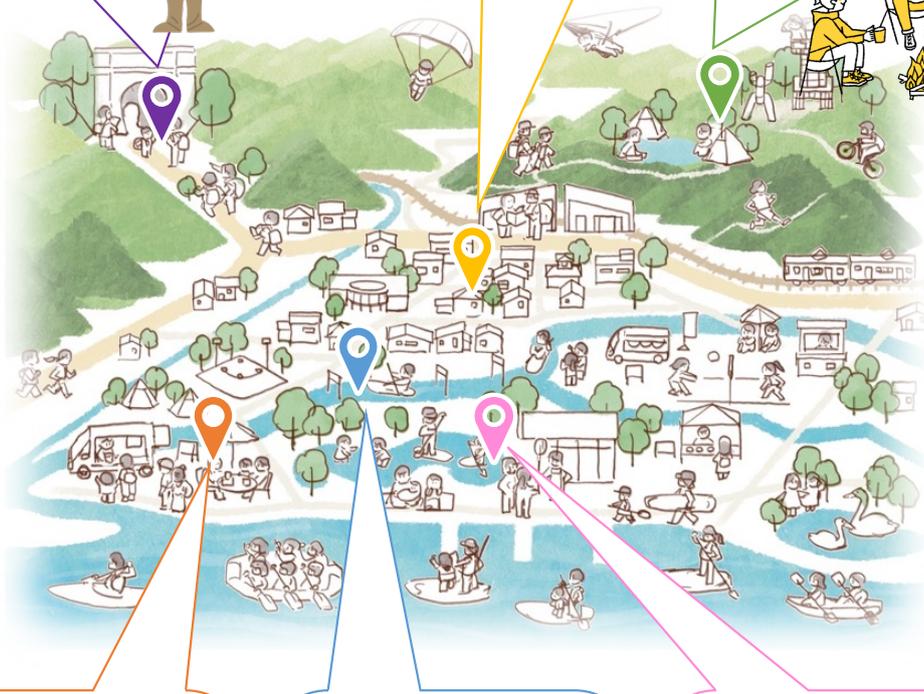
私はここでカフェを運営するために移住してきました。空き家をリノベーションしました。ランチは市内のママさん、ディナーは公園でテント泊をする方など、様々な人が来ますよ。

まちなかの
カフェ店主



今日は東京から友人と遊びに来ました。長峰山で登山をして、これからキャンプをするところです。北アルプスを一望できて贅沢ですね！明日はまちなかに行って、昼食を食べて帰る予定です。

東京の会社員



今日はマルシェが開催されていると聞いて家族で遊びにきました。子どもはじゃぶじゃぶ池でSUP体験をしているので、これからセンターハウスでコーヒーを買って見に行こうと思います。

県内に住む
家族



世界大会に向けて日々練習をしています。競技環境が整う前川には世界各地からアスリートが合宿に来るんです。休日は地域の子どもや一般の方にカヌーの体験会やイベントもやっています。

カヌー選手



カヌーの地域クラブに入って、放課後や休日に練習しているよ。やったことがなかったけど、今は上手くなって、来月の大会に向けて練習しているんだ！身近にこんな場所があって良かった！

明科の子ども



4 管理運営の方針

(1) 事業手法

事業手法は、民間事業者のノウハウを活かした事業効果と市の財政負担軽減につなげるため、PPP（公民連携手法）/PFI（公共サービスを民間主導で行う）の活用を検討します。

土地や建物の所有形態を含めて、様々な組合せが想定できますが、魅力的で経済的な施設整備と安定的な施設運営・管理を行っていく必要があるため、従来方式だけではなく、指定管理者制度、DBO方式、コンセッション（公共施設等運営権）方式、Park-PFI（公募設置管理制度）などを検討します。

根拠法	区分	概要	資金調達	設計業務	建設業務	運営主体
	従来方式	市が自ら資金調達の上、設計、建設は市が民間事業者に分離発注し、施設運営は市自らが行う。	市	市	市	市
地方自治法	指定管理方式	市が自ら資金調達の上、設計、建設、運営を市が分離発注で行う。委託ではなく、行政処分の位置づけで行い、民間は指定管理料を得て行う場合と市の承認を得て、料金を徴収する場合がある。	市	市	市	民 (市)
PFI法	DBO方式 (Design Build Operate)	市が自ら資金調達し、設計・建設、維持管理及び運営を市が民間事業者に請負・委託で一括発注する方式。 設計・建設は設計建設事業（JV）、維持管理・運営はSPCが実施。	市	市	市	民
PFI法	コンセッション方式（公共施設等運営権）	施設の所有は市に残したまま、事業運営権を民間事業者に付与し、民間が利用料を収入源として長期的に経営、運営を担う。 施設の改修などは、民間の資金調達で行うことができる。	民	民	民	民
都市公園法	Park-PFI	飲食店、売店等の公募対象公園施設の設置または管理と、その周辺の園路、広場等の特定公園施設の整備、改修を一体的に行うものを公募により選定する制度。	市/民	民	民	民

(2) 事業の進め方

民間活力導入に際しての整理、市と事業者の役割分担やリスク分担の検討など、さらなる詳細な検討を進め適切な事業手法で推進します。

第4章 事業化に向けたスケジュール

1 事業スケジュールの想定

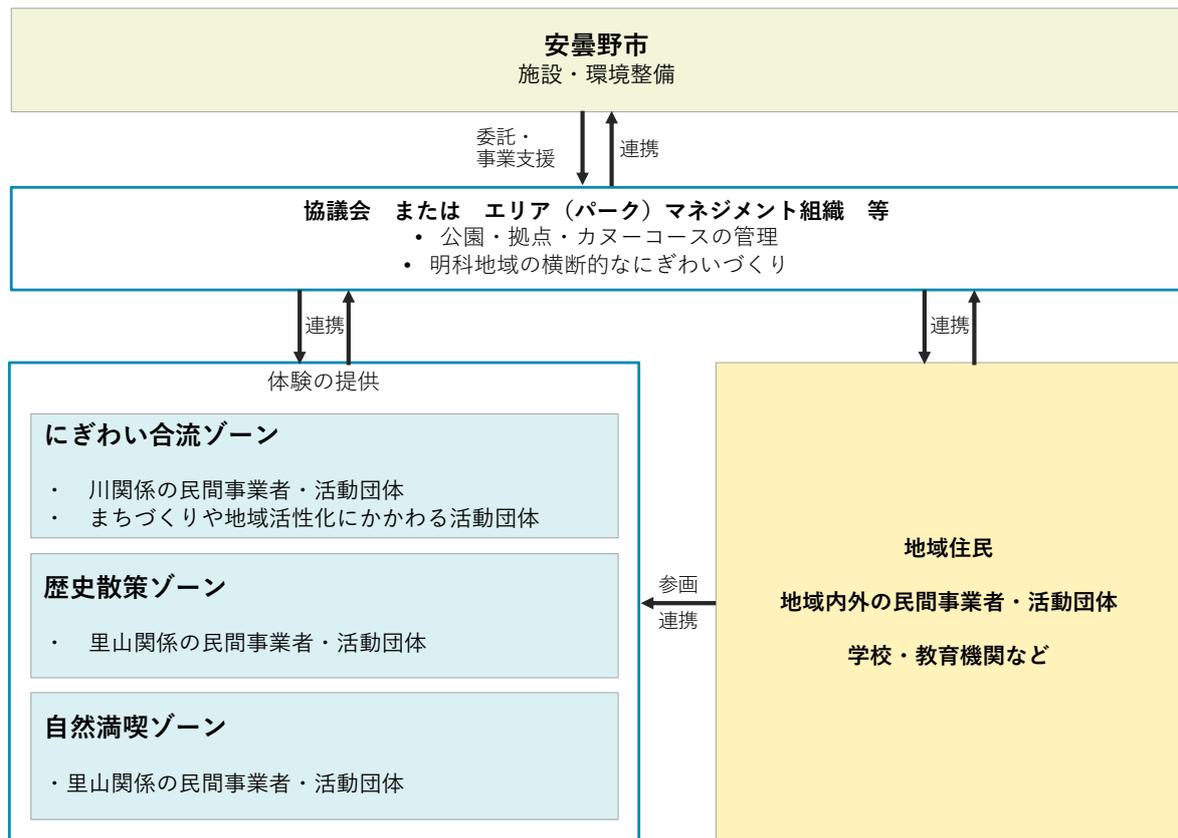
アウトドア拠点整備については、令和8年度を目標に整備を進めます。犀川や前川など河川整備については、河川管理者（国、県）と協議、調整し、整備に努めます。

	R6年度(2024)	R7年度(2025)	R8年度(2026)	R9年度(2027)
拠点整備	基本設計	実施設計	<div style="border: 1px dashed green; padding: 5px;"> ・プロモーション、プレ事業 ・イベントや大会等ソフト事業の拡充 </div> 拠点整備	拠点運営
河川整備	調査・設計 かわまち申請 国や県との河川協議、調整		河川工事	
市民の動き	かわまち委員 河川管理検討会 運営組織の設計・検討		河川利用ルール作り等 人材育成、学校連携、地域クラブ運営等	

2 推進主体の整備

本構想の実現に向けては、にぎわい拠点の運営主体の確保はもちろんのこと、各ゾーンにおける担い手組織との連携など、エリアマネジメントの視点が必要です。

各ゾーンで行われるイベントの連携強化やWEB・SNSなどを使った効果的な情報発信などを行う、協議会またはエリアマネジメント組織を組成して、明科地域のにぎわい創出に取り組めます。



3 まちと市民の機運醸成

前述の通り、拠点の設置及び河川の工事にはある程度の時間がかかります。この中では、市民が明科でこれから起ころうとしていることを自分ごと化し、さまざまなフェーズで“知る”“体験する”ことが重要であると考えます。

そのため、事業スケジュールにある通り、拠点の設計や河川の設計とは別に、かわ、まち、山、空が一体的に連携して盛り上がっていくにはどうしたら良いのか、具体的な事項を話し合う「かわまち委員会」を立ち上げます。また、今後公園と河川を管理していく団体に関する協議なども行い、まちとして本構想に関わる素地をつくります。

また、市内の多くの方は、前川や犀川など“水郷明科”の遊びを体験したことがないと考えられます。拠点の施工に向けて、市内からも多くのご理解をいただけるよう、積極的に体験会やワークショップなどを行い、市民の機運を高めていきます。

4 子どもたちの教育・学校連携

明科地域を持続可能な地域としていくには、地域の子どもたちに明科を好きになってもらい、誇りに思ってもらうことが大切です。アウトドア拠点を中心として、地域の学校や地域クラブ等と連携しながら、地域の魅力を知る環境教育や水辺の安全を学ぶ防災教育をはじめ、選手・ガイドの育成など検討していきます。

巻末に、参考資料として

- ・基本構想の策定経過（会議・WSの開催経過一覧）
- ・策定委員名簿
- ・WS参加団体等一覧

を掲載する予定です。